

論文

## 孤独死報道の歴史

小 辻 寿 規\*・小 林 宗 之\*\*

### はじめに

「孤独死」は、2000年頃からメディアなどで急速にクローズアップされ始め、少なくともそれが社会的に語られ、問題化されたのは最近のことであると受けとられている。

孤独死は「一人暮らしをしていて、誰にも看取られず自宅で亡くなった場合」<sup>1</sup>を主にいい、千葉県松戸市の常盤平団地における孤独死<sup>2</sup>、北九州において男性が「おにぎりが食べたい」と書き残して孤独死した事件<sup>3</sup>などをきっかけに、この問題は多くの人々に注目されるようになった。それ以前は、阪神・淡路大震災における孤独死が、そして2010年からは「無縁社会」<sup>4</sup>、「無縁死」という言葉でも取り沙汰されるようになった。

しかし、いま——そう一義的でないとしても——「孤独死」とされるような事例が本当に報道され知らされてこなかったのか。報道されているとすればどのような内容のものであったのかそれを明らかにしておくことには意義があると考えられる。というのも、いま孤独死は現代の病理として語られ、この時代に固有のことであるように受け止められている。しかし、本当に現代の病理なのだろうか。

その真偽をたしかめ、その認識に違うところがあるのであれば、今度はそのことの意味を考え、次に、なぜ近年のこととして言われ、対策が求められているのかといったことを考える必要があり、その第一作と本稿を位置づけている。本稿においては孤独死が「現代の病理」でいるのか否かを明治から阪神・淡路大震災までの報道を中心に論じ、それ以降のものについては、今後の論文において取り扱うこととする。

「報道」を扱う場合、「事実」なのかどうかという問題は常に付きまとう。だが、少なくとも文字資料によってのみ、一定以前の過去は知りようもないのも事実といえる。そのため本稿においては孤独死「報道」を押さえる。出現率を知りたいのではなく、あったかなかったのか、あったとすればその語られる文脈はどういったものだったのかを明らかにしたい。

### 1. 孤独死への視角

#### 1. 1. 「無縁社会」と孤独死

2010年、日本においては、「無縁社会」という言葉が流行語の一つ<sup>5</sup>となり、孤独死や孤立といった問題が社会問題としてクローズアップされた。「無縁社会」キャンペーンを行っているNHKは孤独死や「身元不明の自殺と見られる死者」や「行き倒れ死」といった死を「無縁死」と表現し年間3万2000件に及ぶことを報じた。また、「無縁社会」という問題が注目される中で、7月下旬からは、いわゆる「高齢者の所在不明問題」<sup>6</sup>が発生し、より一層、人と人のつながりの問題が問われることとなった。このような社会情勢の中で、今、孤独死や「無縁」という言葉

---

キーワード：孤独死、社会的孤立、無縁社会

\* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2010年度入学 公共領域

\*\* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2010年度入学 公共領域

で表された人間関係の希薄化、社会的孤立といった問題が注目され<sup>7</sup>、その対策として地域社会における高齢者の見守り活動などが盛んに行われつつある。

しかしながら、孤独死や人間関係の希薄化、社会的孤立といった問題は決して新しい問題とはいえ、高齢化社会に突入した1970年代や阪神・淡路大震災の起こった1995年、そして2000年代と度々起きていることも事実である。またそれは、問題が時代の流れの中で解決されずに放置されてきた歴史であるといえる。そのためには「無縁社会」の根底にあるものを探ることが重要であるといえる。「無縁社会」の問題に関係する研究としては、後述する孤独死の先行研究や社会的孤立問題の研究<sup>8</sup>があるが、現状としては1970年代以降の実態を明らかにしたものといえ、それ以前の日本の近代社会における「無縁社会」の状態を明らかにしたものは私たちが見る限りあまり見られない。そのため、1970年以前の「無縁社会」の実態を明らかにすることは「無縁社会」の源流に接近する作業となり、重要性が増しているといえる。

そこで本稿においては、その「無縁社会」として取り上げられるトピックの中で、「無縁死」の中核をなす孤独死をテーマに、明治以降の日本の近代社会の中で、新聞というメディアによってどのように取り上げられてきたのかを明らかにする。

## 1. 2. 調査・研究における孤独死

孤独死という用語は現在のところ、明確な定義はない。東京新聞や新井康友（新井，2010）らは「一人暮らしをしていて、誰にも看取られずに自宅で亡くなった場合」と定義しており、これがもっとも一般的に使われている定義といえる。新宿区（新宿区高齢者保健福祉推進協議会，2006）は、孤独死対策を講ずべき対象者を「二週間毎程度に見守る者がいない、独居又は高齢者のみ世帯の高齢者」としており、言い換えれば、2週間以上誰にも見つからず、その後発見された場合は孤独死と扱うといえる。NHKスペシャル取材班&佐々木とく子の取材（NHKスペシャル取材班&佐々木とく子，2007：32 - 34）によれば、額田勲は、「孤独死とは低所得で、慢性疾患に罹病していて、完全に社会的に孤立した人間が、劣悪な住居もしくは周辺領域で、病死及び自死に至るとき」、岩田正美は、「すでに社会関係が絶たれていて、その結果誰も死に気づかず、死後かなりたってから、第三者に発見された場合」としている。

これらの定義とは異なり、孤独死者の死後の扱いにこそ、孤独死かどうかの本質があると考えている者もいる。孤独死者や自殺者が住んでいた物件の特殊清掃<sup>9</sup>を行っている高江洲敦は孤独死者を何百人も見送ってきた経験から、「遺体を引き取る人が誰もおらず、火葬や特殊清掃をふくめた費用を誰が出すのかと揉めているような死」（高江洲，2010：221）を、本当の意味での孤独死だと考えている。また孤独死は、自宅で亡くなった場合を示すことから、身元が分からない行旅死亡人などは通常、孤独死としては扱われない。

このように、孤独死という用語には、研究者やメディアの中でも定義に多くの乖離があることから、孤独死の数を厳密に比較することは現状では難しいといえる。

これらのことを踏まえ、本稿においては「孤独死」を「一人暮らしをしていて、誰にも看取られずに自宅で亡くなった場合」という東京新聞や新井の定義を基にして、以降の記事検索にあたっては、死後発見されるまでの時間や状況については特に考慮しない。あいまいな形にしておくことで、より多くの事例を抽出する。そうすることで、「孤独死」とされる現象がどういう形で出てきたのかを見ることが出来るようになる。

1970年代から孤独死という言葉を使う報道はされ始めたが、研究はあまりされてこなかった。河合も「それらについての調査が一部でされたが研究についてはあまりなかった」（河合，2009：14）と述べている。孤独死の研究が本格的に始まったのは、1995年頃からで、これは阪神・淡路大震災により、地域の人間関係が崩壊した状態に陥った高齢者たちが一人で誰にも看取られず、臨終の時を迎えたという事態からその問題を法医学、医療の立場から捉えたというものである<sup>10</sup>。その後2000年以降、孤独死の問題がメディア等で報道されるようになり、また、都市部でも孤独死する高齢者が多発したことから、孤独死に対する研究や意見が研究者の立場からも出されるようになったのが現状である。

### 1. 3. 孤独死についてのメディア分析と調査方法

メディアによる孤独死の描写・分析を行った研究は、管見できる限りにおいて、殆どないと言ってもよい。唯一ともいえるのが、青柳涼子「孤独死の社会的背景」である。同論文では、1970年以降、朝日新聞において報道された孤独死の記事について数量・内容ともに分析した、画期的なものである。「40年近くも前に、本書<sup>11</sup>で紹介される最近の孤独死事例とほぼ同様の状況で亡くなった人たちがいたことに、まず驚かされるのではないですか」（青柳、2008：80）と、1970年代、日本がまだ高度経済成長の真っ只中にあった時期に、現在言われるような孤独死の事例があったことを指摘している。

青柳の調査は、朝日新聞の記事データベース「聞蔵」により、①見出しの中に「孤独死」を含む、②地域面ではなく本紙（全国的記事）、③東京本社版、という条件のもと、1945年以降の記事を検索し、記事件数をまとめている（青柳、2008：80）。その結果、1945年（しかし、1969年まで記事は0件となっており、実質的には1970年から）～2007年までで計66件の記事があったとされている。青柳の調査結果は画期的なものであり、一定の評価をすべきものである。しかし一方で、この方法では拾えない記事がかなりたくさんあることも一つの事実である。

朝日新聞のデータベースの都合上、1984年を境に、その前と後で記事の本文検索の可否が分かれており、1984年以前は検索対象が見出しのみ、1985年以降の記事は記事本文がテキスト化されており、本文検索が可能となっている。青柳は1984年以前の検索方法に合わせる形で、それ以降の検索を行っている（青柳、2008：103）。

そのため、見出しに「孤独死」が含まれない記事は検索から漏れることになるのだが、それを出来るだけ回避するという目的から、「キーワード」がそれぞれの記事に設けられている。見出しには無い語で、記事の内容を判断してキーワードとして補い、検索にで拾いやすくするというシステムで、本文検索が可能な1985年以降の記事にはなく、それ以前の紙面のデータベースにのみあるシステムである<sup>12</sup>。青柳自身「全体として、かなり厳しい条件設定をしたといえるでしょう」（青柳、2008：103）と述べているように、「キーワード」は除外して検索を行っている。すなわち、この66件の検索結果というのはかなり範囲を狭めて行った調査であると言えるだろう。

それに対して私たちは、より定義を緩やかにして孤独死に関連する事象を抽出していくという目的に即して、まず「キーワード」を検索対象に入れ、さらに時間軸を広げて明治以降の新聞記事について調査を行うことにした。具体的には、朝日、読売それぞれのデータベースに、「孤独死」「孤独」「孤立」「独居」「高齢者」「老人」といったような単語を、組み合わせを変えつつ入れて繰り返し検索し、記事見出し、キーワードいずれかにヒットした記事を集め、その中から関係のあるものを抽出するといったやり方をした<sup>13</sup>。「キーワード」は前述のように記事を検索によって抽出されやすくするために振られたものであるが、振った人の感覚によってキーワードの質、量ともに変わってくることは言うまでもない。したがって、実際に紙面を一枚一枚めくって確認する以外に記事を網羅することは現状のシステムでは不可能であるが、しかし先行研究が1970年代から始まっていることを考えても、“その前”を（限界はあるにせよ）記述しておくことは十分に意義があり、また必要なことだと考える。

そのため、私たちの調査は数量分析よりも（現在の視点でいえば孤独死と言われるような）事例を探すことに主眼を置いたため、1985年以前と以後で、厳密に言えば検索方法が変わっていることになる。従って、本稿は青柳の研究に対して数量的分析を用いて反証を試みようというものではない。あくまでも目的は、青柳の研究では空白になっている1970年以前、具体的には明治以降から新聞紙上で「孤独死」の報道がどのようになされてきたのかを探る探索的なものである。そういった意味では、検索方法に統一がとれていない点は問題とならない。本論文では、これらを勘案しつつ、研究対象を明治期の新聞紙面にまで広げ、孤独死報道の歴史を辿ってみることとする。

## 2. 「孤独死」をめぐる新聞報道の歴史

### 2. 1. 戦前期

「孤独死」という言葉自体が新聞紙面上に登場するのは1970年代以降の話である（詳細は後述）が、現在「孤独死」と言われるような、独居者が誰にも看取られることなく死亡し、死後数日も経ってから発見される、という事例は、それ以前から、それこそ明治時代の新聞紙面からも少ないながら散見される。

## 「握り死

(中略) 本所何町に何某といふ材木屋あり家ハ十八代の奮きを伝へ間口ハ五間の広きにあり真鍮火鉢店に輝きて身代の堅きを證せば帳簿格子斜めに曲りて勘定の奥を見せず番頭手代も多くありて天晴一大商家なりしも当代の主人何某(五十八年)ハ儉約の闕を超えて吝嗇の部へ足を入れたる握手なれば(中略)呆れて女房も離別を乞へば果ハ何某独りになり商売も不時の損失あれバ止むるに如ずと店を閉めて広い家に只単身影より外に友もなく永き月日を送り来り先祖より伝へたる器物金銀類を奥の一ト間に並べ其前に端座して瞬きもせず守護するを身の勤めとする程なれば親類の者も爪弾きして寄付ず況して他人ハ詞を交す者さへなくて過ぐるうち何某ハ不図病ひに罹りたり然れど価の出る葉など元より飲むべき心なければ命運を天に任せ遂に去る四日奥と店との間の柱に身を倚せかけたまま死去したるを一昨日になりて近隣の誰彼より心付き夫々へ報知して座敷へ入りて見るに・・・(以下略)」

(1884年10月11日付読売新聞)

「コレラ とばかり開た口も塞がれぬ近所の驚きを(中略)近ごろ造作を売って外へ引越さんと諸所探しに出て引越し先も極り造作の買人も付いて今月八日にはいよいよ引払ふとの話なりしが去る六日より家ハ閉め切りとなりて更に明かぬハ近所でハ大かた今度越す家の方へでも行って居るので有らうと噂して其ままに過ぎしが幾日経つても帰った様子の無いハ変だと疑ひ出し一昨日の朝差配人が立合で近所の者が締りを破って入って見ると這ハ如何に△△△(引用者注:記事本文は実名、以下同)ハ座敷の真中に平臥て死んで居るに仰天し久松町警察署へ訴へ出たので直に警部医員が出張して検視されると多分六日ごろコレラ病に罹り独り者の悲しさハ世話をする者もまた警察署へ届ける者もなく吐瀉死に死んだものとの事に近所の者は更に驚きそれぞれ消毒法を行ひ死骸ハ例規通り取片付になったといふ」

(1886年10月14日付読売新聞)

などである。朝日新聞のデータベースでは戦前の孤独死に関する記事を拾い出すことが出来なかったため、読売新聞社のデータベース「ヨミダス歴史館」で検索した。他にも記事が見つけれられたが、いずれも死後何日も経ってから近隣住民(もしくは、近隣住民の通報を受けて駆けつけた警察官)によって発見されたというパターンであった。1886年10月14日付の記事では「独り者の悲しさハ世話をする者もまた警察署へ届ける者もなく」と、単身者のいわゆる“孤独死”する危険性について言及されているが、“だからどうする”という言及は、私たちが見た限りでは(ほかの記事含め)なされていない。

同様の記事は、昭和に入っても散見され、「戸締りの家に血塗れの死体」(1927年11月14日付読売新聞)では、25歳の元駅夫が自宅で死んでいるのが死後1週間程度経ってから発見されたという記事で、病気になった独居者の「孤独死」、しかも高齢者ではなく若年者の事例として見る事が出来る。

1933年1月14日付読売新聞夕刊に掲載された記事は、

## 「家中小銭と新聞が一杯 奇生活の老人凍死

瀧野川区〇〇〇〇無職△△△△(六五)は十一日の昼就寝したまま十二日の午後三時半ごろになつても起きる気配がないので、付近のものが戸をはづして入ると台所で絶命してゐるのでビックリし瀧野川署へ届けたが△△さんは世にも不思議な変わりもので三畳と六畳の家のなかには足を踏むところもないほど新聞雑誌を散乱させどの雑誌のページのなかにも十銭五銭の小銭が一つばい、そのうへ赤革のトランク百個、靴六十足、靴のなかにも小銭がザラザラしてをるが他には一切持物とてなく寝るにも半坪ばかりの台所で蒲団も用ひず新聞紙だけ、玄関にはいつも鉄の太鎖でガツチリ閉め誰れをも入れないといふ始末、検視の結果昨夜来の寒気で凍死したものと判明したが爺さんは昨年十二月まで陸軍省の小使をやつてをり退職手当の金を千円



図 1933年1月14日付読売新聞夕刊

を持つてみた」

というもので、地域との関係を拒否する高齢者が、散らかった自室で“孤独死”したケースといえるだろう。このようなケースは、今現在でもときどき目に付くケースである。

私たちが見つけた戦前期の孤独死に関する記事の数は10件。数字だけ見れば決して多い数字ではない。しかし、「孤独死」という言葉は使われていないものの、現在であれば孤独死とされるような事例が、戦前期の新聞報道の中からも少ないながら見出すことが出来るのである。

## 2. 2. 1970年代前後

新聞記事に「孤独死」という言葉が登場するのはこの頃からであり、また前述の青柳調査も実質的にはここ（1970年）から始まっている<sup>14</sup>。

新聞記事に「孤独死」という言葉の初出は、私たちが確認した限りでは、朝日新聞と読売新聞ともそれほど大きな開きはなく、朝日は1970年4月16日、読売は同20日付である。

「また東京の孤独死 一週間目発見

十五日夜東京・荒川のアパートで独身青年の病死がたずねて来た同僚によって一週間ぶりにわかった。死んでいたのは、荒川区東日暮里（中略）△△△△さん（二〇）で荒川署の調べによると、斉藤さんは九日から会社を休んでおり、階下の共同新聞受けには九日付朝刊からの新聞がたまっていた。同じアパートに住んでいる人たちとの付き合いがなく、新聞がたまっても出張ではないかとだれも気にもとめなかったという。

△△さんは昨年秋、脊椎カリエスをわずらい、千葉県柏市の会社へ勤めながら通院していた。月に二、三日休むため会社でも「また休んでいる」としか思っていなかった。ところがあまり長く休むので同僚が十五日夜にたずねてみると、居間のフトンの中で死んでいた。」（1970年4月16日付朝日新聞）

見出しに“また”とあるので、調べてみると「また老人の孤独な死」（1970年3月30日付＝東京・渋谷で82歳の老人が死亡、死後1週間から10日ほど経ってから老人の長女により発見される）といった記事が出てきたが、記事の見出しや本文に「孤独死」という言葉は登場しない。

また1977年には、新幹線の中で老人が孤独死するという事件が起こっている。東京駅に到着した新幹線の車内で70歳の男性が死亡、同じ車両にいた乗客は誰もそれに気が付かなかったという<sup>15</sup>。

朝日新聞のデータベースでは1970年から1984年までの間に25件の記事がヒットした。それらは事件を報じた記事がほとんどであるが、当時の記事を見てみると、必ずしも行政は何も対応していなかったわけではないことも伺える。

1973年11月19日付朝日新聞に、「老人の孤独死 月末から実態調査」という記事がある。同記事によれば、全国社会福祉協議会が全国民生委員協議会の協力を得て、一人暮らしで死亡した老人の実態調査に取りかかるとしている。この調査は9県1市<sup>16</sup>で行われ、その調査結果は翌1974年6月25日付朝日新聞で報じられている<sup>17</sup>。

また、1984年11月11日付で「58年の都内の「孤独死」千人 60歳代以上が4割、半年間気づかれぬ例も」という記事があり、東京都監察医務院の調査結果が報じられており、1983年中に東京23区内で約1000人の孤独死（同記事によれば、独居死1084人、内自殺214人。さらに「発見者は（1）隣人二百五十三件（2）知人二百四十三件（3）管理人二百十二件（4）親類二百九件の順。民生委員ら福祉関係者の発見は四十二件どまりだった」としている）<sup>18</sup>。

このほか、1992年には朝日新聞京都版の記事で、次のような記事が見つかった。

「「ふれあい郵便」独居老人に届ける愛 大江町社協がスタート 京都

大江町社会福祉協議会が大江郵便局と提携して、郵便局員が独居老人に郵便を届ける時にひと声かける「ふれあい郵便」を、今月から始めた。お年寄りの安否を確認するのが狙いで、府内では初めて。

同町は人口6186人のうち65歳以上が28.3%を占め、高齢化率は府内最高。独り暮らしの老人も185人おり、

2年前に3人のお年寄りが相次いで孤独死しているのが見つかった。独居老人は民生委員が家庭訪問し、体の不自由なお年寄りは町のホームヘルパーが介護しているが、少しでも訪ねる機会を増やすため、ふれあい郵便を始めた。

仕組みは、同協議会が毎月1、2回、「ふれあい郵便」と書いたスタンプを押して手紙やはがきをお年寄りに出す。配達する大江郵便局の外務員は、老人宅の郵便ポストには入れず、「こんにちは。郵便ですよ」と声をかけて、お年寄りに手渡す。老人が出て来なかった場合は、翌日もう一度訪ね、それでも応答がない時は、同協議会か民生委員に連絡。職員らが安否を確認する。また、体の具合が悪い時も同協議会に伝言できる。

対象は78歳以上で、ヘルパーが訪問していない54人。最初の便りは町内の4保育園で園児たちが書いている。敬老の日までに同協議会があて名を書き、スタンプを押して出す。

ふれあい郵便は全通が以前から提唱し、郵政省が今年度から過疎地に限って協力することになった。同協議会は「手紙は婦人会やボランティアグループに書いてもらう。実施状況を見て、郵便の回数や対象者を増やしたい」と話している。」(1992年9月10日付朝日新聞京都版)

地域版の記事であるが、1990年代初めから、孤独死を防止するための地域の取り組みがなされていたことがわかる記事である。

### 2. 3. 阪神・淡路大震災

1995年1月17日午前5時46分に発生した阪神・淡路大震災により、孤独死が大きくメディアでも取り上げられるようになる。

阪神・淡路大震災での孤独死が最初に紙面でニュース記事として報道された(社説やコラム、論説記事ではなく、ストレートニュースとして報道されたもの)のは、朝日新聞の場合1995年6月19日付で、次の記事である<sup>19</sup>。

「明石の仮設住宅でお年寄り病死 死後2、3日 【大阪】

十五日午後三時半ごろ、兵庫県明石市鳥羽の仮設住宅で、新聞集金員△△△△さん(七一)が死んでいるのを明石保健所の保健婦が見つけた。明石署の調べでは、死後二、三日で、急性心不全で病死したとみられる。仮設住宅での高齢者の孤独死は、分かっているだけで、△△さんで六人。

調べによると、△△さんは居間のこたつに足を入れた状態で仰向けに倒れていた。妻(六七)は約二十年前から入院中で、同市王子二丁目のアパートで一人暮らしをしていたが、阪神大震災で全壊したため、四月十七日に仮設住宅に一人で入居した。三日前には近所の人が見かけていたという。」

震災から約5ヵ月後の記事で、この記事によれば被災地の仮設住宅での孤独死は6人目だという。読売新聞では、6月9日付に「震災仮設住宅でまた孤独死 67歳男性 死後2、3週間／神戸・兵庫区」という大阪本社版の記事があり、このときが3人目という。阪神・淡路大震災による仮設住宅は震災から約5年後の2000年1月に全て解消されたが、それまでの間に発生した孤独死は233人<sup>20</sup>に上るといふ。

また、被災した人々が仮設住宅から移り住んだ神戸市の復興住宅で1995年～2003年までの間に発生した孤独死は190件<sup>21</sup>とされる。2009年1月16日付の朝日新聞記事<sup>22</sup>では「阪神大震災で被災し、神戸市の災害復興住宅に暮らす高齢者の4割が地域に友人を持たず、3割が「今でも地震を思い出し、不安になる」と訴えていることが、朝日新聞の調査でわかった。震災から14年を迎え高齢化が進むが、お年寄りを核としたコミュニティーが十分に成立していない」としており、事実上の孤独死予備軍となり対策が必要であることが伺える。

青柳も指摘しているように、従来の孤独死が都会でいわば散発的に起こっていたのに対し、災害により極めて限定的な範囲で発生した孤独死は、孤独死の新たな側面が露呈するとともに、地域コミュニティの重要性が改めて問い直される契機になったといえよう。

## 結論

孤独死の事例は（少なくとも、新聞報道という形で遡ることが出来る）明治の時代から存在する（ただし、「孤独死」という言葉がその当時からあったわけではない）。その当時から孤独死といわれる事例は散見され、少なくとも新聞記事でも少ないながら報道されている。「孤独死」の事例というのは高齢者に限らず、若年層の孤独死についても昔からあったことが分かった。このようなことから、「無縁社会」と関連づけて語られるようなものは、少なくとも明治期には社会の中に存在していたことが推測され、今後はその前史についてもより明らかにしていく必要がある。

明治期以降の孤独死についての新聞記事を見ていくと、

戦前期：「孤独死」という言葉はまた存在していないものの、現在の視点から見れば「孤独死」とされる事例は確かに存在し、それが少ないながら新聞にも報道されている。しかし記事の少なさから、大きく社会問題として盛り上がるほどではなかった。

1970年代：「孤独死」という言葉が生まれ、初めて社会問題化されるのがこの時期。ただし新幹線内の「孤独死」に見られるように、言葉は使われているもののその意味合いは必ずしも定まっていなかったように思われる。

1995年～2000年頃：阪神・淡路大震災により被災した人々の孤独死が多発したことから地域コミュニティは破壊され孤独死に繋がったと新聞の論調からは読み取れ、地域コミュニティの希薄化を外の地域でもあったことから、もし自分の地域でも震災が起こったらとの考えから多くの市民に再び注目されることになる。

といった流れがあるように思われる。

このように、孤独死という問題は、長く続いている問題であり、その時々メディアに注目され、今の社会と同じように地域社会から孤立し孤独死するという今とほとんど同じような事件としてきたことが分かった。そして、注目されないようになれば、実態は潜在化するという側面があったといえる。

ただ、メディアの報道とは別の指標に注目すると、高齢者たちの生活に孤独死という問題が、実感として湧いてきたことも現状として存在する。内閣府の調査（内閣府、2010）によれば、60歳以上の高齢者のうち、16.6%が孤独死を非常に身近に、26.3%が孤独死をまあまあ身近に感じ取り、合計42.9%もの高齢者が孤独死を身近に感じていることが明らかとなった。このようなことから孤独死は社会問題としてだけではなく、一人ひとりの個人の問題としても考えられるようになってきているといえる。また、この42.9%が孤独死を身近な問題と考える理由として、その中の30.1%が一人暮らしであること、26.3%が近所づきあいの少ないことをあげている。

一方、今回の研究において孤独死問題を研究していく上での課題も多数見えてくることとなった。断続的に起こっている孤独死ではあるが1940年代～60年代、さらに1970年代後半から1980年代前半などにかけては、孤独死報道が鎮静化している。なぜ、鎮静化したのか、そこに社会的背景があったのかなどを考察することは今後の課題といえる。

2010年7月28日、生きていれば111歳になっていたという人が自宅からミイラ化した遺体で見つかり、実際は30年以上前に死亡していたらしいという事件が発覚した、それ以降、次々と高齢者の所在不明問題が明らかとなった。100歳を超えてもなお、居住地が明らかではない失踪高齢者の年金を受け取っているケースなどの場合、その高齢者は誰と連絡をとっているかなど極めて不明な部分があり、生存していた場合は人間関係が希薄に、また、亡くなっている場合は、誰にも看取られず、孤独死しているということも考えられる。そのため、失踪高齢者が、どういった形で生存しているか、または孤独死していないかなど、今後のメディアの報道を見守りつつ分析していく必要があるといえる。

## 【註】

- 1 2006年5月7日の東京新聞朝刊
- 2 2000年以降、孤独死が相次いだ。団地ぐるみで孤独死対策に乗り出した取り組みが全国的に注目されている。
- 3 2007年7月、北九州市で52歳の男性が孤独死。自宅から「おにぎりが食べたい」という書き置きが見つかり、さらに生活保護を辞退するよう市側に求められたこと、同市で同様に生活保護に絡む孤独死が相次いでいたことなどが明らかとなり、生存権の問題と絡み市の

対応に批判が集まった。

- 4 「無縁社会」(池富ら, 2010: 32-39) とは、「血縁」、「地縁」、「社縁」といった個人間の相互扶助システムの縁をことごとく失い孤立した状態を表現した造語である。NHK「無縁社会プロジェクト」取材班が作った。
- 5 2010年の現代用語の基礎知識選「ユーキャン新語・流行語大賞」のトップテンの一つに「無縁社会」が選ばれている。
- 6 これについては、小林宗之・小辻寿規, 2011, 「新聞報道から見る高齢者所在不明問題」立命館大学生存学研究センター編『生存学 Vol.3』生活書院。【刊行予定】に詳しい。
- 7 NHK「無縁社会プロジェクト」取材班, 2010, 『無縁社会』, 文藝春秋社。などに詳しい。
- 8 河合克義, 2009, 『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』, 法律文化社
- 9 主に孤独死や自殺の現場で、消臭や消毒、虫の駆除、ゴミ処理、清掃、リフォームなどをし、死者が出る以前の状態まで部屋を戻す作業をいう。
- 10 兵庫県社会保障推進協議会の調査(兵庫県社会保障推進協議会, 1996)によれば、震災直後の1995年3月から1996年6月の間に73人(男50人, 女23人)が孤独死している。特に男性は12月、1月という寒い季節に相繼いで死亡しているのが特徴といえる。また、50歳から60歳という壮年層が比較的多く孤独死している事態が報告されている。この調査によれば、孤独死は死後0.1日～60日のものまでと、誰にも看取られず亡くなった人に関してはくまなく孤独死として捉えている。
- しかしながら、この調査以降、阪神・淡路大震災以降の本格的な孤独死研究は、上野易弘ら(上野・西村・浅野・主田・足立・矢田・龍野, 1998)の研究まで、相繼ぐ震災による孤独死報道があったにも関わらず、2年半の歳月を要することとなる。
- 11 中沢卓美・淑徳大学孤独死研究会編『団地と孤独死』中央法規
- 12 2010年に完成、運用が始まった、朝日新聞明治・大正期 DBの説明文(全文は([http://database.asahi.com/library2/main/help/meizitaisyo\\_db.html](http://database.asahi.com/library2/main/help/meizitaisyo_db.html)参照)の「(4)「歴史キーワード」について」には、次のように書かれている。
 

「明治天皇」「白井六郎仇討事件」「日本海海戦」など、歴史的出来事や人名、当時大きく取り上げられた事件などは、原文に言葉がなくとも「歴史キーワード」化して関連する記事に付与してあり、一覧表に掲げた言葉をクリックすることで、事象ごとにまとめて検索できます。」

この機能がない場合、純粋に見出しの用語のみで検索するとするならば、検索で記事をヒットさせるには当時使われていた用語を熟知していることが前提となる。この点は記事の本文検索が出来ない期間(朝日の場合、1984年まで)、読売のDBでも同様であり、見出しにその語が含まれなくても、記事がヒットするようになっている。
- 13 主な検索結果の例を挙げるならば、「孤独死」で120件、「孤独」で1332件、「孤独」&「死」で118件、「独居」138件、「独居」&「死」で9件など(以上は読売のデータベース(ヨミダス歴史館「明治・大正・昭和」)での例)。
- 14 戦前に(数は少ないながら)記事が見つかったものの、1970年まで数十年間に亘る空白がある。私たちの調査でも、この期間の記事は見つけ出すことが出来ず、記事件数はゼロとなっている。ここに、①この空白期間の間、本当に記事がなかったのか、②仮に記事がなかったとして、なぜ1970年頃から記事が出てくるのか、という2つの疑問が浮かんでくる。①については今後の課題とするところであるが、②については、高齢化社会への突入という点が挙げられるだろう。
 

1970年、日本は総人口に占める65歳以上の高齢者の割合が7%を超え、高齢化社会に突入した。あくまで仮説であるが、それが契機となって、孤独死の問題も高齢者の問題の一つとしてクローズアップされるようになったということが考えられる。ただし本文中で引用した記事にもあるように、孤独死は必ずしも高齢者(だけ)の問題ではないことは、当初からはっきりしているのであるが。
- 15 1977年10月22日付朝日新聞「新幹線で老人孤独死 乗客気づかず」
- 16 秋田、茨城、埼玉、福井、愛知、滋賀、広島、高知、宮崎の9県および北九州市。はっきりしたことはわからないが、後に「おにぎり食べたい」で話題となる北九州市が調査対象に入っているのは単なる偶然だろうか。
- 17 1974年6月25日付朝日新聞「家族との断絶深まる 一人暮らしの老人 死亡実態調査まとまる」
- 18 同記事については、青柳も引用して取り上げている(青柳, 208: 82-83)が、青柳は記事を「1987年11月11日」とし、「1987年に東京都監察医務院が行った調査」、「この記事から、1986年の1年間に約1000件の孤独死(自殺を含む)があったこと、その約半数が高齢者層であったことなどが分ります」と述べており、記事の日付および調査年を間違えている。正しくは本論文中にあるように、1984年の調査で、83年の統計である。
- 19 1995年の記事について、青柳調査では記事件数が「0件」になっている。しかし、私たちの検索方法で検索したならば、全体で58件、うち本紙(全国版)35件(内訳: 東京本社10件、大阪本社24件、西部本社1件)と地域面23件が抽出された。特に東京本社版10件について、青柳調査で0件であったのは、これらの記事が見出しに「孤独死」という語を含んでいないからである。
 

朝日新聞のデータベースで、この1995年～1999年の間に「孤独死」という単語を見出し・本文で取り上げられた記事の件数は全部で499件。このうち、320件が本紙(内訳: 東京本社109件、大阪本社204件、西部本社6件、名古屋本社1件)で、残りの199件が地域面である。東京本社版より大阪本社版の記事が多いのは、やはり阪神・淡路大震災による孤独死の事例が中心となっていることが原因だろうと推測される。地域面に着目してみると、地域面179件のうち、兵庫県版が100件、約56%を占めており、1995年の一年間に関し

ては、23 件のうち 20 件が兵庫県版の記事であることから、それが阪神・淡路大震災の影響によるものであるといえるだろう。

- 20 2000 年 1 月 14 日付朝日新聞「阪神大震災の仮設住宅孤独死、233 人 【大阪】」  
21 2010 年 1 月 14 日付朝日新聞夕刊「高層階、「命」の孤立 「孤独死 2 週間」突出 阪神大震災復興住宅 【大阪】」  
22 2010 年 1 月 16 日付朝日新聞「神戸・復興住宅の高齢者 40% 「友人なし」 月収 10 万円未満、42% 【大阪】」

## 【参考文献】

- 青柳涼子, 2008, 「孤独死の社会的背景」中沢卓美・淑徳大学孤独死研究会編『団地と孤独死』中央法規.  
新井康友, 2010, 「泉北ニュータウンにおける孤独死・孤立の実態」『賃金と社会保障』1517: 15 - 22.  
兵庫県社会保障推進協議会, 1996, 「被災から一年半 孤独死 74 人——兵庫県社協調査 (1996 年 7 月 4 日) (特集 阪神・淡路被災から一年半)」『賃金と社会保障』1185: 38 - 40.  
池富仁・臼井真粧美・深澤猷 他, 2010, 「特集 無縁社会——おひとりさまの行く末」『週刊ダイヤモンド』98 (15): 32 - 61.  
河合克義, 2009, 『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』, 法律文化社.  
北九州市社会保障推進協議会, 2006, 「北九州市 生活保護申請拒絶による「孤独死」事件 (特集 生存権を保障する生活保護行政こそ国民の願い)」『福祉のひろば』77 (442): 24 - 27.  
小林宗之・小辻寿規, 2011, 「新聞報道から見る高齢者所在不明問題」立命館大学生存学研究センター編『生存学 Vol.4』生活書院.  
内閣府, 2010, 『高齢者の地域におけるライフスタイルに関する調査結果』.  
中沢卓実著・結城康博監修, 2008, 『常盤平団地発信 孤独死ゼロ作戦——生きかたは選べる!』, 本の泉社.  
NHK「無縁社会プロジェクト」取材班, 2010, 『無縁社会』, 文藝春秋社.  
NHK スペシャル取材班&佐々木とく子, 2007, 『ひとり誰にも看取られず——激増する孤独死とその防止策』, 阪急コミュニケーションズ.  
額田勲, 1999, 『孤独死——被災地神戸で考える人間の復興』, 岩波書店.  
大山真人, 2008, 『団地が死んでいく』, 平凡社.  
生活問題研究会, 1997, 『「孤独死」——仮設住宅における壮年層の暮らしと健康の実態調査報告書』, 生活問題研究会.  
新宿区高齢者保健福祉推進協議会, 2006, 「高齢者の孤独死対策について」, 新宿区高齢者保健福祉推進協議会, 第 2 回 (2006 年 11 月 16 日) 会議資料.  
高江洲敦, 2010, 『事件現場清掃人が行く』, 飛鳥新社.  
上野易弘・西村明儒・浅野水辺・主田英之・足立順子・矢田加奈子・龍野嘉紹, 「震災死と孤独死の死因分析とその法医学的検討」『神戸大学都市安全研究センター研究報告』特別報告 2: 35 - 42.  
矢部広明, 2005, 「「孤独死ゼロ作戦」に取り組む常盤平団地 (特集 高齢化するニュータウン 住宅保障は?)」『月刊ゆたかな暮らし』280: 16 - 21.

## History of News Reports on Lonely Death

KOTSUJI Hisanori, KOBAYASHI Muneyuki

### Abstract:

The term “lonely death” (*kodokushi*) refers to the death of a person who had lived alone, had died without anybody noticing and was discovered only after his or her death. When the term was first used, around 1970, lonely death was considered a problem of the elderly. Recently, lonely death has received sudden attention and has begun to be considered a general social problem. It is highly possible, however, that lonely death is not a new phenomenon, that there have always been some people who have died in a state of social isolation, and that it is not only the elderly who have died in this way. Based on a search of Asahi Shimbun and Yomiuri Shimbun articles, this paper examines news reports, from the 1880s to the present, of people dying alone. It finds that, although the term “lonely death” did not exist before the 1970s, cases that can be called lonely death according to the current definition are found in newspapers from the 1880s. The number of reported cases was smaller than today but the phenomenon of lonely death existed. Moreover, the research shows that it has not only been old people who have died lonely deaths but young people as well.

Keywords: lonely death, social isolation, unrelated society

## 孤独死報道の歴史

小 辻 寿 規・小 林 宗 之

### 要旨：

独居者が誰にも看取られずに亡くなり、そのことに周囲の誰も気付かず、死後発見される「孤独死」。比較的最近になって取り上げられる機会が増え、いかにも現代の社会問題のように扱われてきた。しかしながら、人間関係が希薄な人は昔からいた可能性が高く、現代の社会問題として取り扱うのは早計である。そのため、本論文は、過去に「孤独死」についてどのように存在してきたのか、もしくはそうではないのかを探る。

その結果、今でいう「孤独死」に該当する事例は明治の時代から存在することが明らかとなった。「孤独死」という言葉それ自体は存在していないものの、現在の観点からすれば「孤独死」といわれるような事例は1880年代の新聞報道の中からもあることが分かった。1970年以降の報道よりは孤独死報道の件数は少ないが、明治期の新聞を見たところ、必ずしも高齢者だけの問題ではなく、古今老若男女問わず誰もが陥る可能性がある問題であるといえる。